

紗子の家はルールで溢れている。家中の壁には隙間なく紙が貼られていて、一枚一枚に、この家の調和を保つための決まり事が書かれていた。挨拶は大きな声です。宿題が終わるまでゲーム禁止。パパママではなくお父さんお母さんと呼ぶ。紗子が三歳のとき、野菜を意地でも食べなかった紗子を怒鳴りつけた母を宥めようと、ご飯は残さず食べる、と父がチラシの裏に書いて壁に貼ったのが始まりだった。紗子は全く覚えていないが、この日から紗子の好き嫌いが収まったらしい。歓喜した母は、育児で疲れると父に新たなルールを提案するようになり、それを父が書き、貼り付けていった。紗子が小学生の頃に母は居なくなつたが、その後もルールは父娘の関係を保つものとして機能し続けた。日々増殖していく紙は、紗子がこの家で成長した記録であり、家族が正しく存在するための行動指針となつた。

◇

ゴン、という鈍い音がしたとき、紗子は米を研いでいた。炊飯器の電源を入れたら豚肉を焼いて、というか油がないじゃん、とシームレスに流れていた思考が、裁断機で切られたように停止した。

タオルで手を拭き、音の発信源と思われる玄関のほうへと向かった。壁に手をつけて、恐る恐る歩く。紗子が足を動かすたび、紙の擦れる音がした。父が会社を早退して帰宅したのかと思つたけれど、玄関には異変がなかった。

玄関脇にある紗子の部屋を開ける。テーブルライトとペン立てだけが置かれた勉強机。作家の名前順に本が並べられた本棚。角を揃えて畳まれた毛布。紗子がいつも夜の数時間を通りかかると就寝する、見慣れた空間がそこにはあった。何かが倒れたり、落ちた形跡はない。紗子は自室の扉を開けると、その向かいにある父の部屋の前に立った。

「お父さん」

紗子はノックをした。

「お父さん、入るよ」

もう一度ノックをして、扉に当たった耳を澄ませる。何かが動いた気配はなかった。ふう、と息を吐き、扉を開ける。お父さんの部屋に勝手に入らない、と書かれた紙が紗子の脳内に現れて、あれ、この紙ってどこにあるんだっけ、とちらついていたが思い出せなかった。

部屋の電気は点いていなかった。カーテンも閉め切られており、玄関から差し込む僅かな光だけが光源となつた。紗子が目を凝らすと、暗闇の真ん中で何かが微かに動いた。

背広姿の父が、床に体育座りをしていた。

「びっくりした。いるなら返事してよ」

「うん」

顔を両膝に埋めた姿勢で、父は消え入るような声を出した。

「なに、どうしたの。電気点けなよ」

「うん」

「会社、早退したの？」

「いや」

顔を伏せたままの父は紗子の質問に応答するものの、会話をする気はなさそうであった。

「点けるよ」

紗子が電気のスイッチを押すと、白色灯が部屋を照らした。うわっ、という紗子の呻き

声が響いた。床に散乱した酒の空き缶、カップ麺の容器、何かの食べかす。ベッドには衣服が無造作に積み上げられ、一部は床に崩れ落ちてゐる。扉の開閉によって入口が扇形にくり抜かれているだけで、いわゆる足の踏み場もない状態であった。床に散乱したゴミだけではない。すえた匂いがツンと鼻を刺激して、紗子を狼狽させた。

「何これ？」

思わず語気が強くなった紗子の問いかけに、父が何か喋った。頭を上げずに床に向かつて発された言葉はか細く、震えており、紗子には聞き取れなかった。

「え、なに？」

「大丈夫だから」

何がどう大丈夫なのかわからないが、今度の返事ははっきりと紗子の耳に届いた。

「いまご飯つくってるから、待っててね」

そう言つて、紗子は扉を閉めた。息を大きく吸つて、吐き出す。ラベンダーの芳香剤の香りで嗅覚が満たされると、紗子は台所へと戻つていった。

紗子の正面で食事をとる父は、いつもと変わらないように見えた。食卓に着くなり、手を合わせていただきますとはつきり言つていたし、声にも表情にも、紗子がさつき感じた狂気というか、悲壮感というか、そういうネガティブなものは読み取ることができなかった。

部屋にいた父の姿が衝撃で、紗子は夕飯の支度をしながらずっと考えていた。あれだけ散らかっているということは、昨日今日おかしくなつたわけではないのだろう。では、いつから、いつからああいうことになつたのか。予兆はあつただろうか。何年記憶を辿つても思い出せるのは「正しさ」を具現化したような父の姿だけで、ゴミの中でうずくまる中年男の片鱗は出てこなかつた。

「これ、うまいな」

突然父が喋るから紗子はびくつとして、そうこれ安かつたから買ってみたけど美味しかつたの、と父が食べていた茄子の浅漬けに手を伸ばした。

「今日さ」

ご飯を口に運びながら微笑を浮かべている父の所作が、かえつて不自然に思われて、紗子は背筋を伸ばして硬直した。

「朝、乗つてた電車が、駅と駅の間の半端なところで止まつたもんだから、動き出すまでずっと閉じ込められたんだよ。満員電車だから動けないし、しんどかつた」

「それは大変だったね」

「三十分くらい経つたときかな、目の前にいた若い女の子が電話をかけた始めたんだよ。たぶん会社に連絡入れようとしたんだろうね。そしたら、隣にいたおじさんが、ここ電車なの分かつてる？ 迷惑だよね？ って、女の子に注意してさ。女の子はすぐに電話やめたんだけど、おじさんがスイッチ入つちやつたみたいで、電話を掴んで取り上げようとすると、こういうマナーがなつていない奴が電車を止めるんだ、って大声で怒鳴るし。女の子が涙声で謝つたら終わつたけど、そこからの沈黙も気まづくて。最悪だったよ」

なんだそんなことか、というのが紗子の率直な感想だった。口角を上げて話す父の姿にほつとして、紗子も笑みをつくつた。

「私も、去年かな、チャージ足りなかつたみたいで、改札通れなかつたおじさんが女子高生に八つ当たりしてるの見たことある。ああいう行き場のない怒りを誰彼構わずぶつけ

やう人って、見ていて気分よくないよね」

「ちよっと考えれば、怒っても意味ないって分かるはずなのにな」

普通に話をして、普通に食事が進められる。日常の風景が、そこにはあった。いま紗子の目の前で食事をする父と、数時間前に汚部屋で俯いていた父は同一人物なのだろうか。あれはテレビで見たゴミ屋敷の映像が脳裏に焼きついていて、屋敷の住人が父に入れ替わった夢を見ていただけだよ、と誰かに言われたら信じてしまいそうな気分だった。

最後の茄子の浅漬けをとった父に、まだあるから取ってこようか、と聞いた。皿に手をかけて立ち上がろうとした紗子を、いや大丈夫、と父は制してご飯を口に運ぶ。紗子が浮かしかけた腰を下ろすと、父は話を続けた。

「パンパンの電車で一時間もいると、息苦しくなってきた。やっと電車が動いて次の駅でドアを開けてくれたとき、生き返ったみたいだった」

「わかる。具合悪くなるよね」

「ずっと顔色悪い人もいたし、辛そうだったな。誰も動けないから助けられないしさ。あ、そう。それで、やっと会社に着いて調べてみたら、電車が止まった原因は人身事故だったらしくて、丁度俺が乗ってた電車がはねたんだった。人を」

「え？ うそ」

「初めて見たけど、SNSってすごいよな。事故を見てたっていう人が書き込んで、時間と場所を考えたら、俺が乗った電車だった。スーツの男が閉まっている踏切に飛び込んだんだった」

「すごいね、それ。なんか、なんとも言えないけど」

紗子が絞りだした相槌に、こんな偶然ってあるんだな、と父は嬉しそうに言い、箸を置いて立ち上がった。

「ごちそうさま」

「もう終わり？ まだ残ってるけど」

「うん」

「調子悪いの？」

「ごちそうさま。紗子、ありがとう」

へ、と間拔けな音が紗子の口から漏れた。口が半開きのまま父が居間から出ていくのを見送ると、急激な脱力感が紗子を襲った。父が座っていた椅子を呆然と見つめる。さつきまで父に隠れていた向こう側の壁には、「ご飯は残さず食べる」と書かれた紙が貼られていた。

いつも二人で向かい合っていた場所に一人でいると、驚くほど静かであった。そもそも食事時のテレビも、大きな音を立てるのも行儀が悪いから禁止だったし、父と一緒にいても大して賑やかではなかった。それに、父が先に完食して紗子だけが取り残される日だって、幾らでもあった。だが、いま紗子を感じている静寂は未体験のものである。食事を再開すると、箸を持ち上げる音、箸と皿が触れる音、咀嚼音が普段の何倍にも響いた。時間がゆっくり流れ、それに伴って紗子の動作もゆっくりになった。

豚肉を口に入れて、噛む。三十回数えて、飲み込む。味噌汁をすすす。一塊のご飯を持ち上げ、口に入れる。噛む、噛む、噛む。

紗子のご飯を飲み込んだとき、電話の呼出音が静寂を切り裂いた。一定のリズムで鳴り続ける電子音に、紗子の心拍音が呼応する。紗子は立ち上がって、電話の前まで三歩歩き、大きく息を吐き出した。

電話を掛けてきたのは警察を名乗る男の人で、紗子の父はいま隣駅の大病院にいる、と告げた。訝しんだ紗子が父の部屋を覗くと、夕飯前に見た汚部屋はそのまま、中心部だけがゴミや衣類に囲まれてぼっかりと穴になっていた。風呂もトイレも確認した。やはり父はいなかった。保留を解除して通話に戻ると、朝から調べていたのですが身元の特定に時間がかかってしまい申し訳ございません、と電話先のおじさんは申し訳なさそうに、それでいて仕事をやり遂げた達成感を含むような上ずった声で謝罪した。

それからの会話は、紗子の頭に入ってこなかった。曖昧な返答を繰り返して電話を切ると、紗子は向き直って居間を見渡した。食卓には、紗子の分の料理と、父が食べ残した料理がそのままあった。さっきまで紗子と父は食事を共にしていた。その証明が、揺らぐことなく、目の前に鎮座していた。一方で、この光景が紗子の混乱を助長した。

紗子は眉根を寄せて腕を組み、その場でぐるぐると歩き始めた。これからどうする？ まずはお爺ちゃんに電話して、いやまず私が病院に行くべきか、そもそもさっきの電話が全部嘘かもしれないから、いやでもこんな悪趣味な嘘である？ 紗子は、無意識に足元を凝視して、ひたすらに周り続けた。本当にお父さんが朝から病院にいるとして、なんで？ というか私はずっと何をやっていたということになる？ 下を向いていたせいで歩行の軌道が少しずつずれていたらしく、紗子の肘が壁にぶつかった。ふらついて顔を上げると、沢山の紙が目の前に並んでいた。

「ご飯は残さずに食べる」

「テレビは一時間以内」

「十二時までに寝る」

紗子は壁を凝視し、立ち尽くした。突然涙が溢れ、鼻水が出て、幾ら手で拭っても追いつかず、床に小さな水溜りができた。

目の前にあつた紙を右手で触った。紙の上側から壁と紙の隙間に指を入れて、握りしめてみた。グシャ、という音とともに、文字の上に皺ができた。右手に力を入れて、ぐいつと手前に引いてみる。四隅が壁に固定されている紙は、縦に二分するよう裂け、左半分が壁に残った。その左半分も、勢いよく剥がす。隙間なく敷き詰められた紙の間に壁が現れた。快感だった。その上にある紙も掴み、乱雑に剥がす。剥がした紙を丸めて床に転がし、また別の紙を剥いだ。紗子は無心で、紙を破いては丸めて投げた。身体中の水分が無くなってしまいそうなほど涙は流れ、たまに呼吸困難になっては咳き込んだ。紙を破り捨てながら居間を一周したとき、床が見えないほどに紙で一杯になった。

紗子は、仰向けに倒れ込んだ。紙が首や腕や足に刺さるし、ぼこぼこして寝心地が悪い。気持ち悪い感触が何だかおかしくて、わはは、と声を出して笑ってみた。もう一度、わははは、と声を出してみる。ははは、という音の連続がおかしさを増長して、笑うのを止められなくなった。一方、涙と鼻水も留まることを知らず、紗子の下敷きとなっている紙が次々と変色した。

再び電話が鳴りだした。しかし、紗子の耳には、自分の笑い声しか届かない。